兵庫県文化財調査報告　第277冊

神戸市長田区

御船遺跡 II

フレール長田大道建設事業に伴う発掘調査報告書

2005年
兵庫県教育委員会

神戸市長田区

御船（みふね）遺跡 Ⅱ

フレール長田大道建設事業に伴う発掘調査報告書

調査対象地周辺

調査対象地全景（北から）

例　　言

1．本書は、兵庫県神戸市長田区大道通３丁目に所在する御船遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2．調査は、（仮称）長田・大道通３丁目団地建設事業に関連して、住宅・都市整備公団関西支社震災復興事業本部の依頼を受け、平成９・10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．整理作業については、フレール長田大道建設事業に関連して、都市基盤整備公団関西支社の依頼を受け、平成16年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4．遺物写真の撮影にあたっては、株式会社タニグチ・フォトと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

5．本書で使用した方位は国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。また各遺構図面で使用している方位は座標北を示す。

6．本書では下記の地図を加工して使用している。

第２図　神戸市発行　1/2,500 都市計画図「長田」　昭和48年

第５図　国土地理院発行　1/25,000 地形図「神戸首部」　平成９年

国土地理院発行　1/25,000 地形図「神戸南部」　平成10年

7．調査担当者の転勤により、整理作業および本書の執筆は長濱誠司、藤田　淳、上田健太郎が分担して行い、編集は尾鷲都美子の補助を得て長濱が行った。

本報告書の記述についての文責は長濱にある。

凡　　例

遺構

・本書では、遺構は種類ごとに下記の略号を用いた。

掘立柱建物：ＳＢ　溝：ＳＤ　土坑：ＳＫ　　Ｐ：柱穴

・遺構番号は遺構の種類ごとに平成９年度調査は１～、平成10年度調査は１０１～とし、区別している。

遺物

・遺物は平成９年度、平成10年度の掲載順に番号をつけた。

・土器の断面は、下記のとおり区別している。

須恵器：黒塗り、土師器：白抜き、瓦器：アミかけ

本文目次

第1章　調査の経緯
　第1節　調査に至る経緯 …… （長濱誠司） … 1
　第2節　調査の経過 …… （長濱） … 2
　第3節　整理作業の経過 …… （長濱） … 3
第2章　御船遺跡の位置と歴史的環境
　第1節　遺跡の位置 …… （藤田　淳） … 5
　第2節　歴史的環境 …… （藤田） … 5
第3章　平成9年度の調査
　第1節　調査の概要 …… （長濱） … 9
　第2節　層序 …… （長濱） … 9
　第3節　遺構 …… （長濱） … 9
　第4節　出土遺物 …… （長濱・上田健太郎） … 14
　第5節　小結 …… （長濱） … 15
第4章　平成10年度の調査
　第1節　調査の概要 …… （長濱） … 16
　第2節　層序 …… （長濱） … 16
　第3節　遺構 …… （長濱） … 17
　第4節　出土遺物 …… （長濱） … 19
　第5節　小結 …… （長濱） … 20
第5章　まとめ
　第1節　遺構 …… （長濱） … 21
　第2節　遺物 …… （長濱・上田） … 22

報告書抄録 …… 24

挿図目次

第1図　御船遺跡の位置 …… iii
第2図　御船遺跡調査箇所位置図 …… 1
第3図　調査区配置図 …… 2
第4図　本発掘調査区全体図 …… 4
第5図　周辺の遺跡 …… 7
第6図　調査区土層断面図 …… 10
第7図　掘立柱建物 …… 11
第8図　土坑 …… 12
第9図　ＳＤ０１断面図 …… 13
第10図　平成9年度調査区出土土器 …… 14

第11図　調査区北壁断面図 …… 16
第12図　ＳＢ１０１ …… 17
第13図　ＳＢ１０２ …… 18
第14図　集石土坑 …… 18
第15図　ＳＢ１０２ Ｐ140 出土遺物 …… 19
第16図　柱穴出土遺物 …… 20

表　目　次

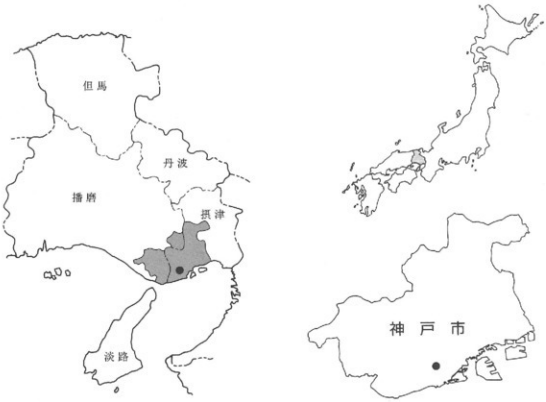
第１表　御鮫遺跡周辺の遺跡 …… 6

カラー巻頭図版

カラー巻頭図版　調査対象地周辺　調査対象地全景（北から）

写真図版目次

図版１　調査対象地周辺　調査対象地全景（東から）
図版２　平成９年度調査区全景（垂直写真）　平成９年度調査区全景（南から）
図版３　調査区北壁断面（南から）　下層確認トレンチ東壁断面（北から）　噴砂検出状況（南から）
図版４　掘立柱建物全景（南から）　ＳＢ０１（南から）
図版５　ＳＢ０１Ｐ１断面（南から）　ＳＢ０１Ｐ２断面（南から）　ＳＢ０１Ｐ３断面（南西から）
ＳＢ０１Ｐ６断面（東から）　ＳＢ０１Ｐ７断面（南から）
図版６　ＳＢ０２（東から）　ＳＢ０２Ｐ18断面（南から）　ＳＢ０２Ｐ20断面（南から）　ＳＢ０２
Ｐ19断面（南から）
図版７　ＳＢ０２Ｐ21断面（南から）　ＳＢ０２Ｐ５断面（南西から）　ＳＢ０２Ｐ21根石検出状況
（南から）　ＳＢ０２Ｐ22断面（東から）　ＳＢ０２Ｐ14断面（南から）　ＳＫ０１（東から）
ＳＫ０１断面（南から）
図版８　ＳＤ０１・０２（南から）　ＳＤ０２（東から）
図版９　下層土器だまり（西から）　下層土器だまり西半部（南から）　下層土器だまり東半部（南か
ら）　作業風景
図版10　平成10年度調査区全景（南から）　調査区南壁断面（北から）　作業風景
図版11　ＳＢ１０１・１０２（西から）　ＳＤ１０１～１０３（南から）　ＳＢ１０１Ｐ150断面（北
から）
ＳＢ１０１Ｐ125断面（北から）　ＳＢ１０１Ｐ119断面（西から）　ＳＢ１０１Ｐ147断面
（西から）
図版12　Ｐ128断面（南から）　Ｐ127断面（西から）　ＳＢ０２Ｐ140断面（東から）　ＳＢ１０２
Ｐ131断面（南から）　ＳＫ１０１（南から）　ＳＫ１０１検出状況（西から）　ＳＫ１０１
集石断面（西から）
図版13　出土遺物（１）
図版14　出土遺物（２）



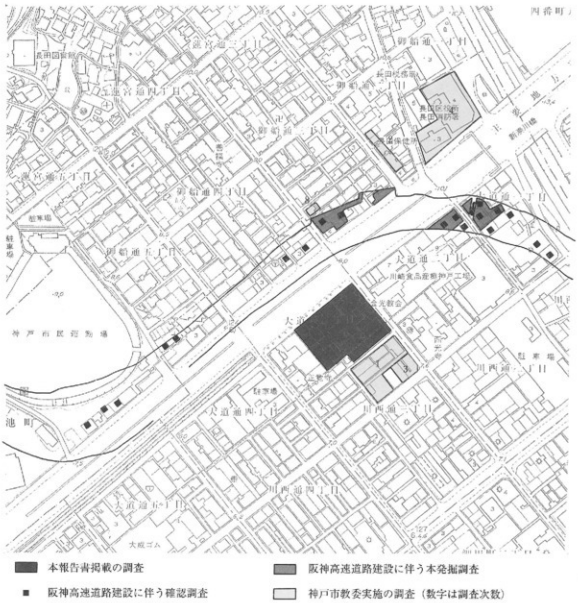
第1図　御船遺跡の位置

第1章　調査の経緯

第1節　調査にいたる経緯

平成7年1月17日早朝に発生した兵庫県南東部地震は、阪神・淡路大震災と呼称されるように阪神・淡路地区に多大な被害をもたらし、多数の死傷者と建物の倒壊および損傷が発生した。また地震直後に各所で発生した火災により焼失した家屋も多数にのぼる。人命救助や被災者への物資の供給、避難所の確保など初動の対処を終えると、次の段階として仮設住宅の提供、そして被災世帯の生活を再建するために住宅を提供することが急務となった。

この阪神・淡路大震災に伴う復興住宅のひとつとして、住宅・都市整備公団震災復興事業本部により、神戸市長田区大道通3丁目に（仮称）長田・大道通3丁目団地の建設が計画された。



第2図　御船遺跡調査箇所位置図（1/3,500）

第２節　調査の経過

今回の調査対象地は、周知の遺跡である御船遺跡の範囲内に位置している。

御船遺跡は平成８年度に神戸市教育委員会（以下市教委と記す）が実施した調査により、南側に隣接する周知の遺跡の神楽遺跡とは別の遺跡であることが判明し、新たに御船遺跡と命名された。遺跡の範囲は新湊川の右岸、主要地方道神戸・明石線をはさんで南北に広がっており、住宅建設や阪神高速道路建設などに伴い市教委および兵庫県教育委員会により継続的に調査が行われている。

調査対象地の現状は工場や民家が存在していることから、これら建物の基礎などにより既に遺構が破壊されている可能性があった。しかし本調査対象地の南側に隣接する神戸市営住宅の建設に先立つ市教委第１次調査において、中世の集落遺跡が確認されているため、本事業地内にも一連の遺跡が広がっている可能性は高いと考えられた。そこで住宅・都市整備公団震災復興事業本部長からの依頼（平成９年５月12日付けおは 31-27）に基づき、遺構の有無と残存状況をみるため確認調査を実施した。

１．確認調査の概要

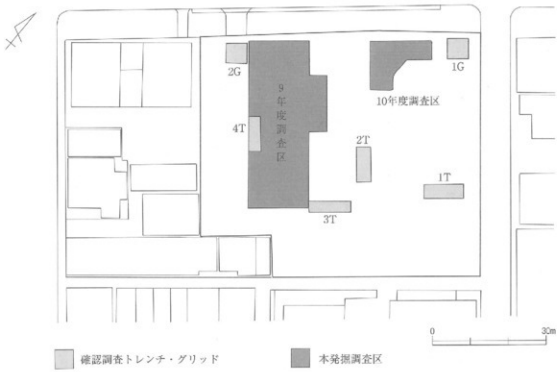
遺跡調査番号：970233

担当者：復興調査第２班　主査　平田博幸　　研修員　丹家昌博

期間：平成９年７月15日、11月４日

面積：48㎡

調査対象地には既存の建物が一部残存しており、確認調査は建物の撤去工事の進捗にあわせ、２次にわたって行われた。



第３図　調査区配置図

第１次の確認調査は、既存の建物の解体・撤去が終了していない段階（７月15日）に行った。建物の建っていなかった２ヵ所の駐車場部分（事業予定地の北東隅部と北西隅部）にグリッド（２ｍ×２ｍ）を２ヵ所（第３図１・２Ｇ）設定した。調査の結果、現地表下１～1.2ｍで遺物包含層、その下に遺構面が存在することを確認した。遺構面では溝、土坑の遺構を検出し、遺物も出土した。この調査により本事業地内にも遺跡の広がることが明らかとなった。

第２次確認調査は、既存の建物が撤去された時点（11月４日）に行い、建物が建設される箇所を中心にトレンチ（２ｍ×５ｍ）を４ヵ所（第３図１～４Ｔ）設定設け、遺構の残存状況を確認した。調査の結果、１Ｔでは遺物包含層は確認できなかったが、３・４Ｔでは遺物包含層を確認した。４Ｔでは遺物包含層の下に遺構面の存在を確認し、溝状の遺構を検出した。事業地の南東部に設定した１・２Ｔでは包含層・遺構とも存在しないことから、事業地の西半部で検出した遺構は市教委第１次調査で検出された遺構群とは一連の遺構群を構成するものではなく、異なる遺構群になると考えた。

２．本発掘調査の概要

平成９年度

遺跡調査番号：970413

担当者：復興調査第２班　主査　平田博幸・高瀬一嘉　　研修員　丹家昌博

期間：平成９年12月25日～平成10年３月３日

面積：726㎡

確認調査の結果、事業地の西半部に遺構が存在することが判明したため、住宅・都市整備公団震災復興事業本部長からの依頼（平成９年11月27日付け　おほ 31-134）に基づき、南北棟の建物建設部分について本発掘調査を行った。また調査途中に下層から遺物の出土をみたため、上面の遺構に対する調査終了後、下層の状況をみるためにトレンチを設定し確認調査を行った。その結果、まとまった遺物の出土をみたが、遺構面は確認できなかった。

平成10年度

遺跡調査番号：980084

担当者：復興調査第２班　主査　平田博幸・藤田　淳

期間：平成10年５月19日～６月２日

面積：120㎡

平成９年度調査の際、集会場建設予定箇所については民家の移転前であったので調査を併せて実施することができなかった。この民家の移転・撤去が完了した段階で住宅・都市整備公団震災復興事業本部長からの依頼（平成10年４月30日付け　おほ 31-13）に基づき、本発掘調査を実施した。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、発掘調査時の現地において出土遺物の水洗や図面整理などを行ったことに始まる。本格的な整理作業は平成16年度に出土遺物を埋蔵文化財調査事務所に搬入して開始した。

遺物の接合・補強から報告書刊行に至る諸作業を平成16年度の単年度で実施した。

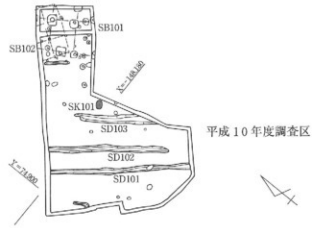
整理の体制

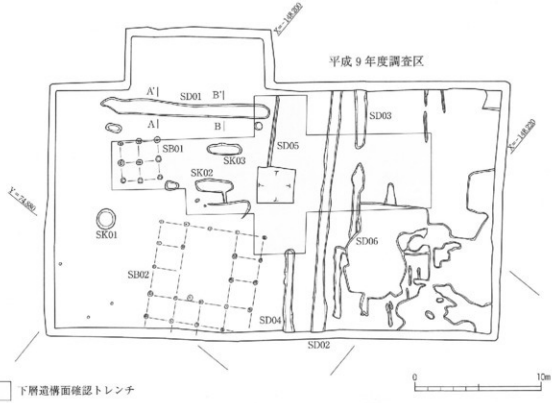
担当職員：主査　長濱誠司

調整事務担当：主査　菱田淳子　工程管理：主査　長濱誠司　　主任　仁尾一人

非常勤嘱託員：尾嶌都美子・眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・前田千栄子・小野潤子・宮野正子・三好綾子・奥野政子・早川有紀

日々雇用職員：荒木由美子





第4図　本発掘調査区全体図

第２章　御船遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

御船遺跡は、六甲山地の南麓、神戸市長田区御船通１丁目～大道通４丁目にかけての範囲に所在する。

六甲山地はその東北部に位置する六甲山（標高931ｍ）を主峰とし、南西方向に向かって摩耶山、再度山、高取山と次第に標高を下げ、西端の鉢伏山では200ｍほどの高さとなる。山地南麓には流出した土砂によって形成された平野部が広がっており、その境には阪神・淡路大震災をもたらした活断層が走り、震源となった淡路島の野島断層へと続いている。平野部では、湊川～生田川の流域より東側で扇状地が良く発達するのに対して、これより西では扇状地の発達が悪く、低平な土地が広がっている。

新湊川の右岸に立地する御船遺跡もこうした低平な沖積地の縁辺部付近に位置する。この湊川の流路変更が行われる前は、鵯越の谷奥から苅藻川が南下して流れを刻み、遺跡の背後から式内社である長田神社付近にかけて舌状の扇状地を形成した。御船遺跡は、この扇状地の末端に立地することになる。

第２節　歴史的環境

旧石器時代では兵庫区の会下山遺跡[1]でサヌカイト製の国府系ナイフ形石器が採集されているが、周辺には他にこの時代の遺跡は見あたらない。

縄文時代では、中期以前の土器が発見されている遺跡は祇園遺跡[2]、名倉町遺跡[3]、長田南遺跡[4]など数少ないが、後晩期になると大開遺跡[5]、上沢遺跡[6]、五番町遺跡[7]、三番町遺跡[8]、松野遺跡[9]、戎町遺跡[10]など多くの遺跡で流路などから土器が発見されている。晩期末には突帯文土器と弥生時代前期の土器が共伴する例も多い。しかし、遺構の発見された事例は楠・荒田町遺跡[11]や長田神社境内遺跡[12]などまだ少数にとどまる。

弥生時代には、東方の湊川流域では前期古段階の環濠集落が発見された大開遺跡[13]、前期～後期の竪穴住居跡や中期の方形周溝墓群が発見された楠・荒田町遺跡[11・12]など、この地域で中核的な集落が成立する。西方の妙法寺川流域でも前期の水田が発見された戎町遺跡[14]が中期以降も盛行し、西摂津地域では最西端の拠点集落と考えられている。これに対して、苅藻川流域では長田南遺跡[4]で中期の竪穴住居跡が発見されているものの、弥生時代の遺跡はまだ少ない状況である。

弥生時代後期～庄内併行期になると、前述の拠点的な集落は縮小し、各河川流域で新たな集落が成立する。苅藻川流域でも上沢遺跡[6]や長田神社境内遺跡[12]に続いて御蔵遺跡[15]、神楽遺跡[16]などの集落が盛行する。湊川流域では祇園遺跡[17・18]や兵庫松本遺跡[19]が、妙法寺川流域では松野遺跡[20]や若松町遺跡[21]、大田町遺跡[22]などを挙げることができるが、**古墳時代前期**になると一部を除いて衰退してゆく。

古墳時代中期～後期には、再び集落が増大し盛行するようになる。苅藻川と妙法寺川のほぼ中間に位置する松野遺跡[9・20]からは、豪族居館あるいは神殿と考えられる柵列で囲まれた掘立柱建物が発見され、その南側には掘立柱建物と竪穴住居で構成される集落が展開する。掘立柱建物と竪穴住居による集落は、神楽遺跡[23]や湊川遺跡[24]でも発見されており、この他、上沢遺跡[21・26]、三番町遺跡[27]（苅藻川流域）や大田町遺跡[28]、鷹取町遺跡[29]（妙法寺川流域）など、この時期の集落遺跡は多い。

先述のように、湊川～妙法寺川流域では古墳時代前期の集落の衰退傾向が指摘されているものの、各河川の水系ごとに平野を見下ろす丘陵上には、首長墓と考えられる前期古墳が築造される。湊川流域の夢野丸山古墳[29]、苅藻川流域の会下山二本松古墳[31]、妙法寺川流域の得能山古墳[28]である。続く中期古墳では、苅藻川河口左岸に全長180ｍの前方後円墳とも推定されている念仏山古墳[33]があったが、市街地化の波にのまれ現在はその姿をとどめていない。また、後期古墳も苅藻川西方の丘陵上の池田古墳群[35~36]の他、夢野丸山古墳の位置する丘陵南側、念仏山古墳周辺などに群集墳が存在したと伝えられているが、内容はほとんど知られていない。

奈良時代には、官道である山陽道が整備され、御船遺跡を横断する「西代通り」を、そのまま東西に延長する直線的なルートが推定されている。その沿道には上沢遺跡[34・35]、御蔵遺跡[36]、神楽遺跡[37]、大田町遺跡[38・39・39]など官衙色の濃い遺構や遺物が発見されている遺跡が集中しており、大田町遺跡は「須磨駅家」の候補地として注目されている。

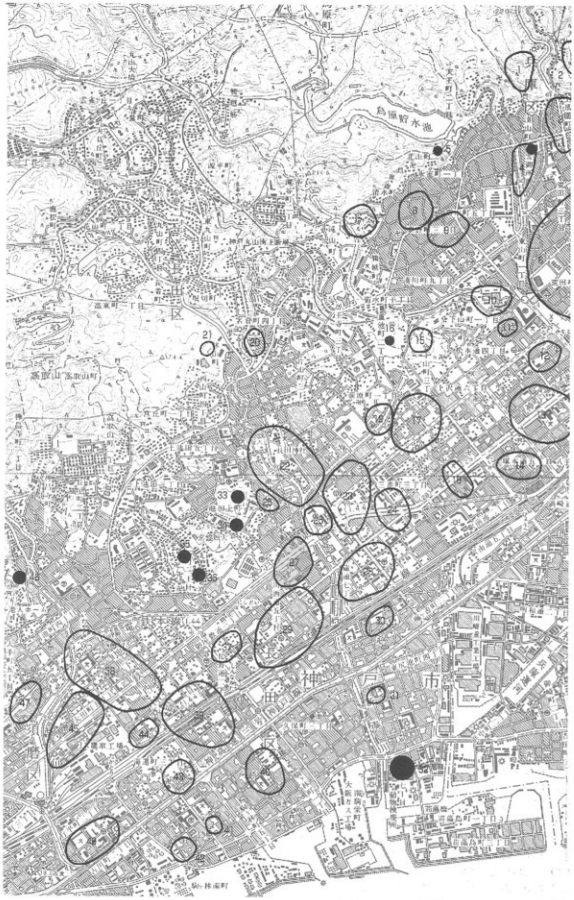
平安時代でも奈良時代から継続する遺跡が多いが、平安時代も終わりに近づくと、この地域が日本の政治の中心として歴史の表舞台に登場することとなる。即ち、平清盛が日宋貿易の拠点づくりとして行った「大輪田泊」の改修、平家一門の別邸建設、そして源平の争乱の中で強行された治承四年（1180）の福原遷都である。これらを裏付ける考古学的な知見は、これまではとんど得られていなかったが、近年、ようやく一門の足跡をたどることができるようになってきた。楠・荒田町遺跡[40]の大型掘立柱建物と二重濠、その北に位置する祇園遺跡[41]の園池を伴う庭園跡は、平家一門に関連する遺構と考えられている。しかし、大輪田泊や福原京の位置については、いまだ確定するに至っていない。

平家滅亡によって改修が中断した大輪田泊は、鎌倉時代の僧、重源によって再び改修され、港湾都市「兵庫津」へと発展する。また、官道としての古代山陽道は次第に廃れるものの、西国街道へと継承され、この地域は陸上交通と海上交通の要路として重要な位置を占めるようになる。兵庫津遺跡[42・43]では、町屋群や石組基礎をもつ倉庫の発見、豊富な出土品によって港湾都市としての繁栄が実証されつつある。

平安時代末～鎌倉時代には、楠・荒田町遺跡[44]、大開遺跡[45]、上沢遺跡[46~48]、長田神社境内遺跡[49]、御蔵遺跡[35]、松野遺跡[38]、二葉町遺跡[50]、若松町遺跡[52]、戎町遺跡[52]など多くの遺跡で中世村落の成立がみられる。市街地での調査ゆえ、その全体像は容易には知り得ないが、掘立柱建物や井戸、掘などで構成されており、二葉町遺跡や御蔵遺跡では屋敷墓と考えられる遺構も発見されている。

第１表　御船遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	天王谷遺跡	13	大開遺跡	25	長田南遺跡	37	水笠遺跡
2	祇園神社裏山遺跡	14	塚本遺跡	26	池田広町遺跡	38	戎町遺跡
3	祇園遺跡	15	会下山遺跡	27	御船遺跡	39	松野遺跡
4	雪御所遺跡	16	会下山二本松古墳	28	御蔵遺跡	40	二葉町遺跡
5	夢野丸山古墳	17	上沢遺跡	29	神楽遺跡	41	長田野田遺跡
6	楠・荒田町遺跡	18	水木遺跡	30	東尻池遺跡	42	長田本庄町遺跡
7	熊野遺跡	19	室内遺跡	31	苅藻遺跡	43	若松町遺跡
8	河原遺跡	20	名倉遺跡	32	念仏山古墳	44	千歳遺跡
9	菊水町遺跡	21	林山古窯址	33	池田古墳群	45	大田町遺跡
10	東山遺跡	22	長田神社境内遺跡	34	池田古墳群	46	得能山古墳
11	兵庫松本遺跡	23	五番町遺跡	35	池田古墳群	47	権現町遺跡
12	湊川遺跡	24	三番町遺跡	36	池田古墳群	48	鷹取町遺跡



第5図　周辺の遺跡（1/25,000）

参考文献

(1) 神戸市立考古館　1979　『縄文人のくらし』
(2) 須藤　宏　1996　『祇園遺跡第1次調査』『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(3) 直良信夫　1943　『神戸市名倉町出土の縄文土器片』『近畿古代文化叢考』
(4) 池田　毅　2001　『長田南遺跡第1次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(5) 前田佳久　1993　『大開遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(6) 阿部敬生他　1995　『上沢遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(7) 松林宏典　1997　『五番町遺跡第5次調査』『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(8) 口野博史他　1994　『三番町遺跡第2次調査』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(9) 口野博史他　2001　『松野遺跡発掘調査報告書　第3～7次調査』　神戸市教育委員会
(10) 山本雅和　1989　『戎町遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会
(11) 丸山　潔　1980　『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(12) 黒田恭正　1990　『長田神社境内遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会
(13) 丸山　潔　1997　『楠・荒田町遺跡第13次調査』『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(14) 山本雅和他　1992　『戎町遺跡第4次調査』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(15) 富山直人他　2003　『御蔵遺跡　第5・7・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(16) 中川　渉他　2001　『神楽遺跡第11次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(17) 西岡誠司　2001　『祇園遺跡第7次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(18) 西岡誠司　2002　『祇園遺跡第8次調査』『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(19) 松林宏典　2001　『兵庫松本遺跡第1次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(20) 千種　浩　1983　『松野遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会
(21) 山田清朝　2000　『若松町遺跡』　神戸市教育委員会
(22) 藤井太郎　2001　『大田町遺跡第12次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(23) 渡辺伸行他　1987　『神楽遺跡』『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(24) 西岡巧次　1989　『滝川遺跡』『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(25) 石鳥三和　2000　『上沢遺跡発掘調査報告書　第35次調査』　神戸市教育委員会
(26) 池田　毅他　2000　『上沢遺跡第9次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(27) 東喜代秀他　2000　『三番町遺跡第8次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(28) 森内秀造他　1994　『大田町遺跡発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会
(29) 大平　茂　1991　『鷹取町遺跡』　兵庫県教育委員会
(30) 梅原末治　1925　『神戸市夢野丸山古墳』『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二輯
(31) 黒田恭正　1989　『会下山二本松古墳』『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(32) 梅原末治　1925　『神戸市板宿得能山古墳』『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二輯
(33) 喜谷美宣　1989　『市街地に消えた古墳－念仏山古墳－』『神戸市立博物館紀要』第6号
(34) 斎木　巌他　1999　『上沢遺跡第3次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(35) 斎木　巌　1999　『上沢遺跡第4次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(36) 谷　正俊他　2003　『御蔵遺跡V　第26・37・45・51次調査』　神戸市教育委員会
(37) 菅本宏明　1981　『神楽遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(38) 口野博史他　1994　『大田町遺跡第2次調査』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(39) 東喜代秀他　1997　『大田町遺跡第5次調査』『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(40) 岡田章一　2005　『楠・荒田町遺跡』『平成15年度　年報』　兵庫県教育委員会
(41) 富山直人　2000　『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会
(42) 内藤俊也　2000　『中世の兵庫津の町並み』『歴史と神戸』第39巻第2号　神戸史学会
(43) 深江英憲他　2004　『兵庫津遺跡Ⅱ』　兵庫県教育委員会
(44) 深江英憲他　1998　『楠・荒田町遺跡』　兵庫県教育委員会
(45) 富山直人　1995　『大開遺跡第4次調査』『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(46) 橋詰清孝　2001　『上沢遺跡第20次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(47) 斎木　巌　2001　『上沢遺跡第21次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(48) 斎木　巌　2001　『上沢遺跡第27次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(49) 前田佳久他　1999　『長田神社境内遺跡第6次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(50) 川上厚志　2000　『二葉町遺跡発掘調査報告書　第3・5・7・8・9次調査』　神戸市教育委員会
(51) 口野博史　2001　『若松町遺跡第2次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会
(52) 山口美正　1999　『戎町遺跡第15次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会

第３章　平成９年度の調査

第１節　調査の概要

平成９年度調査区は10階建ての建物部分を調査の対象とした。

遺構面は１面であり、現地表下1.2ｍ前後の深度にある。その標高は7.2～7.5ｍを測り、北東から南西方向に傾斜している。

遺構面上では２棟の掘立柱建物と建物を中心に構成された屋敷地を限る可能性のある溝を確認した。建物跡の１つは２×２間の総柱建物であり、一辺が30㎝前後の方形の掘方をもつ。残る１棟は径30㎝程度の円形の掘方であり、その埋土も前者のものとは異なる。この建物跡も現状で４間四方分の柱穴を確認したが、東西方向の柱列が調査区外の西側に伸びる可能性があり、梁間４間、桁行５間ないし６間の東西棟建物になると思われる。

また、遺構掘削中に、遺構面下60～80㎝の暗褐色シルト質土の中に、残存状況の良好な土器が多量に含まれることが判明した。そこで上層の遺構に関する調査がすべて終了した後、下層の状況を確認するためのトレンチを設けた。その結果、明確な遺構は伴わないが、沼状の湿地内に一括投棄されたと思われる布留式土器の一群が確認されている。

第２節　層　序

調査区は北側の主要地方道神戸・明石線とほぼ同一のレベルであるが、これは近代以降の盛土によるもので、本来の地形はゆるやかに南側へ傾斜をもつ。市街地化する以前は耕作地であったとみられ、盛土下には旧耕土（１層）が残存している。その下層も旧耕土と思われる土壌層（２～６層）が複数確認できる。遺物包含層と呼べるものは遺構面をはさんで上下２層あり、上層（７層）のものは古墳時代～中世の遺物を包含する。この遺物包含層は北半部では厚いが南半では消滅する。遺物包含層直下の褐色細砂層（８層）上面が遺構面となっている。現地表から遺構面までの深度は約1.2ｍである。各層は、東西方向はほぼ水平な堆積をみせ、南北方向は緩やかに南側へ下がっている。

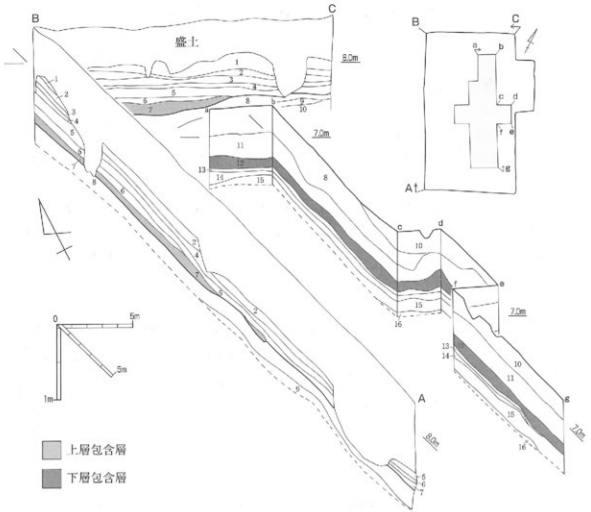
遺構面以下はラミナ状の堆積をみせる砂層（11層）をはさんで、湿地の様相を呈する極細砂質シルトが堆積し、安定した遺構面は確認できない。このうち12層が古墳時代前期の遺物を包含する下層包含層である。

第３節　遺　構

１．掘立柱建物

ＳＢ０１（第７図　図版４・５）

調査区の北東隅部付近で検出した。２×２間の等間の総柱建物である。一辺の長さは約３ｍの正方形平面形となる。東西方向はＮ42° Ｗの傾りをみせ、現地割とほぼ同一の方向に柱の並びをとっている。柱の並びは比較的整っており、柱間は約1.5ｍを測るが、Ｐ４・５間とＰ７・８間は若干短くなっている。



1. オリーブ黒　極細砂（旧耕土）
2. オリーブ黒　中砂混じり細砂（土壌化）
3. にぶい黄褐　極細砂　細礫混じる（土壌化）
4. オリーブ褐　細砂　中礫混じる
5. 暗オリーブ褐　細砂～極細砂　中礫混じる（土壌化）
6. 灰黄褐　細砂～極細砂
7. 暗灰褐　極細砂（土壌化、遺物包含層）
8. 褐　細砂　細礫混じる（上層遺構検出面）
9. 明褐～灰　粗砂～中礫
10. 暗灰黄　中砂～細砂質シルト　中礫混じる
11. 黄褐～灰オリーブ　細砂　下層はラミナ状
12. 灰　極細砂質シルト（遺物包含層）
13. 灰白色　極細砂質シルト
14. オリーブ黒　極細砂質シルト
15. 黒　細砂混じり極細砂質シルト
16. オリーブ灰　細砂～極細砂質シルト　多量に細砂礫混入

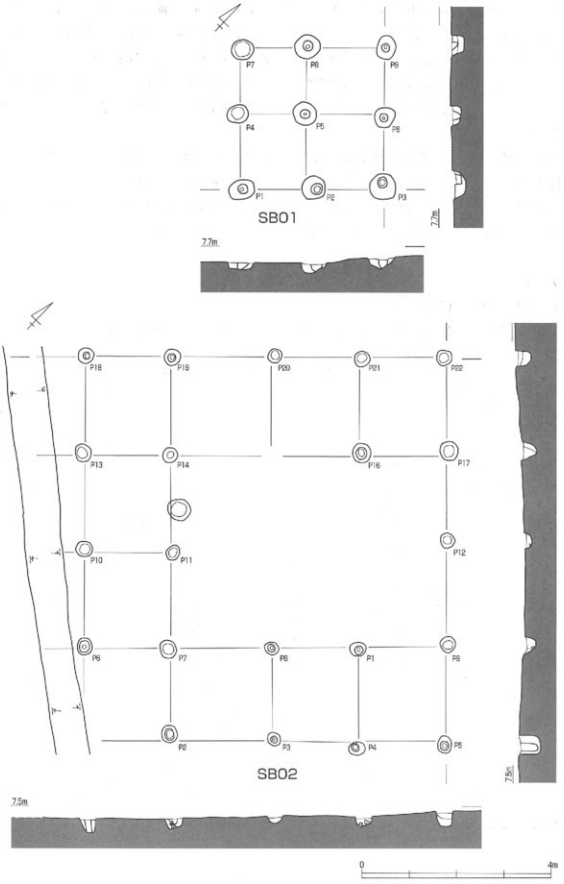
第６図　調査区土層断面図

柱の掘方は一辺が30cm強の方形を意識しているが、形崩れとなったものも見受けられる。いずれの柱穴も深さは浅く20～30cmである。この掘方は暗褐色系の埋土により充填されており、本調査区内で他に同様の土を埋土とする遺構はみられない。２×２間の総柱という構造からみて倉庫などになる可能性が高いと思われる。

柱穴内より須恵器と土師器の破片が出土したが、器種や時期を特定できるものではない。

ＳＢ０２（第７図　図版６・７）

調査区の北西部において検出した建物である。梁間４間、桁行４間を検出したが、桁行はその西側が調査区外へのびる可能性もある。また、梁間の延長が約８ｍであるのに対し、桁行は約7.5ｍと短くな


P7
P8
P9
P4
P5
P6
P1
P2
P3
SB01
7.7m
7.7m
P18
P19
P20
P21
P22
P13
P14
P15
P17
P10
P11
P12
P6
P7
P8
P1
P8
P2
P3
P4
P5
SB02
7.5m
7.5m
0
4m

第7図　掘立柱建物

ることから考えて、東西方向にはさらに１間か２間分のびて、４間×５間あるいは４間×６間の東西棟になる可能性が高いと考えられる。東西方向はＮ30° Ｗの偏りをみせる。柱穴の並びは良好で、南北方向は約２ｍ、東西方向は約1.8ｍを測る。東西方向のＰ11・12間とＰ14・16間の柱穴を欠くが、これは建物の構造に起因するものか、削平により消失したものか不明である。柱穴の平面は径30～40㎝の円形を呈する。掘方の深さは10㎝～40㎝とばらついている。柱穴の重複がないため、建物の建て替えなどは想定できない。

本建物はＳＢ０１とは約３ｍの間隔を置くが、柱の並びが東に振れていること、柱穴掘方の規模・形状が異なることに加え、埋土が灰色を呈することから、やや時期が異なる可能性がある。

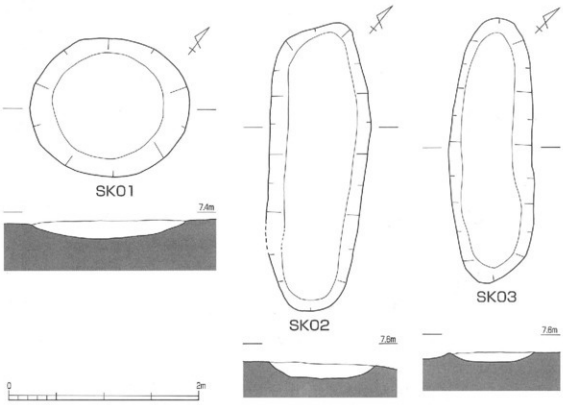
柱穴内からは須恵器椀、土師器鍋・小皿などの土器が出土している。その大半は実測に耐えない小片であり、Ｐ１出土の土師器小皿のみを図化した。

２．土坑

ＳＫ０１（第８図　図版７）

調査区西半部で検出した。位置としては溝に囲まれた屋敷地の内側にあたる。平面形は楕円形を呈し、長径1.65ｍ、短径1.45ｍを測る。断面形は浅いＵ字状を呈し、深さは18㎝である。底部のほぼ中央に礫が１点ある。

遺物は出土していない。



第８図　土坑

ＳＫ０２（第８図）

調査区西半部の屋敷地の内側で検出した。ＳＤ０１とＳＢ０２の間に位置し、ＳＫ０３が北側に平行してある。平面形は長楕円形を呈し、長径3.0m、短径1.05mを測る。主軸はＮ38° Ｗにもち、ＳＤ０１ともほぼ平行している。断面形は浅いＵ字状を呈し、深さは15cmである。

埋土内より須恵器・土師器の破片が出土している。

ＳＫ０３（第８図）

調査区西半部の屋敷地の内側で検出した。ＳＤ０１とＳＢ０２の間に位置し、ＳＫ０２が南側に平行する。平面形は長楕円形を呈し、長径2.8m、短径0.85mを測る。主軸はＳＫ０２同様Ｎ38° Ｗにもち、ＳＤ０１ともほぼ平行している。断面形は浅いＵ字状を呈し、深さは10cmである。

埋土内より須恵器破片が出土している。

３．溝

ＳＤ０１（第９図　図版８）

調査区の東壁に沿うようにしてのびる、南北方向の溝である。溝ののびる方向はＮ37° Ｗを示す。幅は最大で1.5mを測る。長さは検出長約13m強を測るが、その両端は次第に浅くなりついには調査区内で消滅してしまう。断面形は浅い逆台形またはＵ字状を呈し、深さは10～15cmである。埋土は人工的に埋められていた可能性が高く、ＳＢ０２の掘方埋土に近い灰色を呈する。

遺物は埋土内より土師器細片が若干出土したのみである。

ＳＤ０２（図版８）

調査区のほぼ中央部を東西にのびる溝である。溝ののびる方向はＮ125° Ｗを示す。検出長約６m、幅約１mの溝である。方向的にはＳＤ０１とはぼ直交する位置関係にあり、その埋土もＳＤ０１に類似したものとなっている。両端とも調査区を貫通して、調査区外へとのびている。

埋土内より古墳時代に属する須恵器坏片などが出土している。

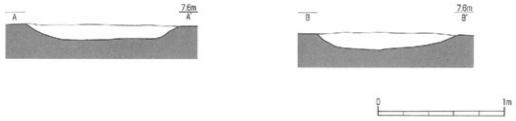
ＳＤ０３～０６

ＳＤ０２の両側に１～２mの間隔をおいて平行する。いずれもＳＤ０２同様東西方向に直線的にのびる溝である。大半の溝は一方あるいは両方が調査区外へのびている。ＳＤ０３は東側のＳＤ０６と同一の溝となる可能性がある。ＳＤ０１・０２と同様に土地を区画する溝と思われる。

各溝とも須恵器・土師器の破片が若干出土しているのみである。

下層土器だまり（図版９）

調査区のほぼ中央部から弥生～古墳時代初頭の土器が集中的に出土している。その残存状況は良好で、



第９図　ＳＤ０１断面図

ローリングなどは全く受けておらず、検出した位置の近距離で投棄されたものと考えられる。そのほとんどが破片となっているものの、甕形土器はほぼ完形に復元できるような状態にあり、その他に壺形土器・高杯形土器・器台形土器などの存在が確認される。遺構などに伴うものではないが、出土の状況として東西方向に列状に並ぶようにも見受けられる。

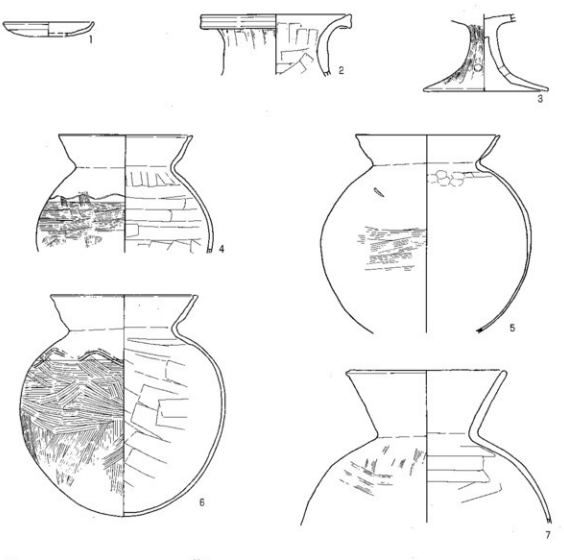
第4節　出土遺物

ＳＢ０２Ｐ１出土土器（第10図　図版13）

1は手捏ね成形の土師器小皿である。口縁部をわずかに屈曲させ底部との境としている。口縁部は横方向のナデを施している。

下層土器だまり出土土器（第10図　図版14）

2は弥生時代後期の広口壺。口縁端部には退化した凹線が2条施され、頸部には縦ハケが施される。



第10図　平成９年度調査区出土土器

3は高杯脚部。裾部で屈曲気味になだらかに開き、内面では屈曲する部分より上部をヘラケズリする。7は直口壺。外面は縦ハケの後横ハケを施し、ナデ消すがハケの痕跡が顕著に留まる。4～6は布留Ⅱ式の甕。外面は縦ハケの後上半部に横ハケを施し、内面はヘラケズリが顕著である。4は肩部に1条のヘラ描き波状沈線文を施す。5は外面の磨耗が激しい。外面肩部に板状原体端部を押圧した列点文がほぼ等間隔に5ヶ所認められる。内面頸部直下には指頭圧痕を顕著に残す。6は肩部に3条の波状文を施している。内面はヘラケズリが顕著に施される。

第5節　小　結

屋敷地を区画すると思われる溝は、基本的に条里制地割を踏襲していると思われる現在の地割に沿って設けられている。

明確な時期を示す遺物の出土がないために確定的なことは断言できないが、溝の埋土は大型の建物跡の柱穴埋土と同一であること、遺構配置の状況などから判断して、大型の掘立柱建物（ＳＢ０２）と溝（ＳＤ０１・０２）はほぼ同一時期の遺構になるものと考えられ、この両者によって遺構群（「屋敷地」）が形成されていたと思われる。つまりＳＤ０１とＳＤ０２によって区画された「屋敷地」の南東部分に、ＳＢ０２が配されていた状況を示すものである。今回検出した遺構は、ひとつの屋敷地の南東のコーナー部分の状況として理解できるため、当然のことながら、この屋敷地は今回の調査区の北西側に広がるものと考える。ＳＢ０２の柱穴掘方内から出土した土器片からみて、これらの遺構は、13世紀代に属するものではないかと判断される。ＳＢ０１については「屋敷地」に伴うものではなく、やや時期が遡る可能性がある。

第４章　平成10年度の調査

第１節　調査の概要

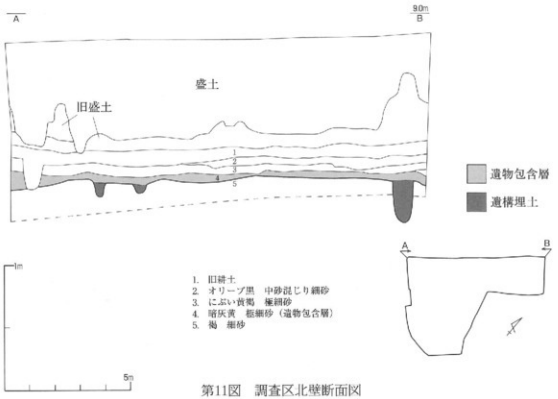
平成９年度の調査では東ほど遺構が希薄になる傾向にあったが、今回の調査区でも中央部に検出した南北方向の溝を隔てて西側には遺構が全くなく、東側に集中することとなった。前回の調査結果と同様、この南北方向の溝が別の屋敷地を限る区画の溝になっているものと思われる。

遺構は掘立柱建物を構成すると思われる柱穴が大半であり、その中から２棟の建物跡を復元することができた。いずれも総柱の建物であるが、その大部分が調査区外となるため、正確な規模は確定できない。そのうちの１棟の柱穴は、比較的大きな規模の方形掘方をもっている。

また、区画の溝と建物跡との空間に集石土坑が１基設けられている。

第２節　層　序

南北方向にはほぼ水平な堆積状況をみせ、層序は平成９年度調査区西壁の層序とほぼ同様である。現盛土下に２層程度からなる旧盛土層があり、さらにその下に旧耕土層（１層）がある。以下、平成９年度第２層に対応すると考える２層、３層がある。４層は遺物包含層であり、平成９年度調査区７層に対応するものと考える。遺物包含層は平成９年度調査区の北半部で一旦途切れたものが再び堆積している。第５層は平成９年度８層に連続するもので、その上面が遺構面となる。遺構面の標高は7.6～7.7ｍであり、平成９年度調査区よりも若干高い。



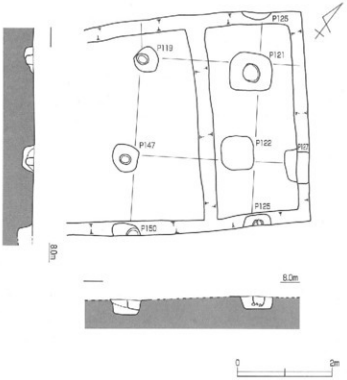
第11図　調査区北壁断面図

第3節　遺　構

1．掘立柱建物

ＳＢ１０１（第12図　図版11）

調査区北東隅部で検出した総柱建物跡である。東西方向１間分、南北方向２間分の柱の並びを確認しているが、北・東・南の三方向が調査区外となるため、建物の規模・棟方向などを確定することはできない。建物の南北方向はＮ35°Ｗを示し、現存する地割にほぼ沿っている。柱間は南北方向が1.5～２ｍ、東西方向が2.4ｍ前後を測り東西方向の柱間が長い建物となる。ただし南北方向のＰ128・121間、Ｐ122・125間、東西方向のＰ122・127間は柱間が1.2ｍ前後となる。柱穴の掘方は不定形ながら基本的には隅丸方形を意識しているようであり、規模は一辺が60～80㎝の規模となる。柱穴の深度はいずれも30㎝程度と比較的浅いため、上半部が後世に削平されたことが想定される。柱穴底部の土質が比較的締まりのない砂層のためか、柱穴底部には根石を置いたものも見られる。



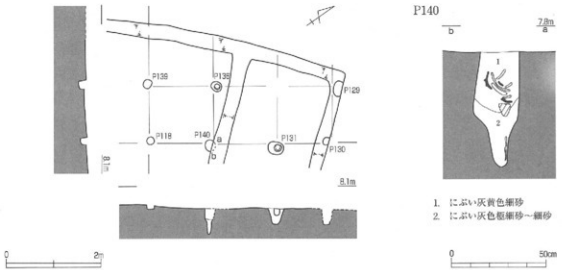
第12図　ＳＢ１０１

遺物は柱穴内から須恵器・土師器・瓦器の破片が出土しているが、実測に耐えるものはなく、出土量も少量である。

ＳＢ１０２（第13図　図版11・12）

調査区北東隅部でＳＢ１０１と重複して検出した総柱建物である。ＳＢ１０１とは柱穴の切合いがないため、両者の前後関係は明確ではない。建物の南西コーナー部分を検出したと考えられ、東西方向で３間分、南北方向では１間分の柱の並びが確認できるが、建物の大半部分が調査区外へ広がるため、建物の規模は断定できない。建物の方位はＮ54°Ｗを示し、地割とは方向を異にし、西に大きく振れている。柱間は東西・南北方向とも1.4ｍ前後と比較的狭くなる。柱穴の掘方は円形を呈し、径20～30㎝を測る。深さは15㎝～60㎝とばらつきがある。Ｐ140は底付近で柱痕と思われる木質痕を確認した。

出土遺物については、Ｐ140から須恵器椀、瓦器椀、土師器小皿が積み重ねたような状態で出土している。その他の柱穴からは土師器などの破片が若干出土したのみである。出土した土器から推察して、本建物の時期は13世紀代と考えられる。



第13図　ＳＢ１０２

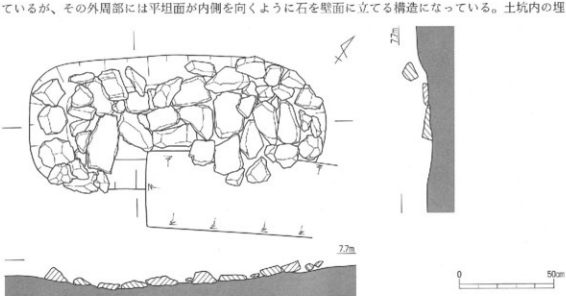
２．柱穴

主に調査区東半部の掘立柱建物周辺に分布する。現状では掘立柱建物は復元しえないが調査区外へ広がり掘立柱建物を構成している可能性がある。柱穴の大半は掘方が平面円形または楕円形を呈し、径15～40cmを測る。ＳＢ１０１を構成するような規模・形状のものはない。多くの柱穴内からは土器が出土しているが、その大半は実測しえない破片である。器種を明らかにできるものとしては、須恵器椀・甕・鉢、土師器小皿、瓦器椀があり、所属時期は掘立柱建物の時期と大差がないとみられる。

３．集石土坑

ＳＫ１０１（第14図　図版12）

調査区のほぼ中央部、ＳＤ１０３の東側において検出した隅丸長方形の土坑である。掘方の主軸はＮ127°Ｗを示し、規模は長さ1.55ｍ、幅0.7ｍ、深さ５cmを測る。土坑内は30cmまでの川原石で充填されているが、その外周部には平坦面が内側を向くように石を壁面に立てる構造になっている。土坑内の埋



第14図　集石土坑

土には少量の炭が混じり、巣石の一部には火熱を受けたために表面が赤色あるいは黒色に変色している。これらの状況から、本遺構は内部で火を用いる施設であると考えられる。したがって遺構の性格としては、火葬施設（あるいは火葬墓）、鍛冶施設などの可能性があるが、出土遺物などがなく断定しえない。

また所属時期も明らかにできないが、主軸の方向が溝などの方向に近似するため、他の遺構と同様13世紀代のものと考えられる。

4．溝

ＳＤ１０１～１０３（図版11）

調査区の西半部を南北方向にのびる。その方向はＮ130°Ｗを示し、ＳＤ０１とほぼ同一方向となる。幅は50～70㎝、深さ20㎝弱で断面形は非常に浅いＵ字形となる。埋土はにぶい灰白色土で掘立柱建物跡の柱穴の埋土とは異なる。遺構内からの遺物の出土がほとんどない。

第４節　出土遺物

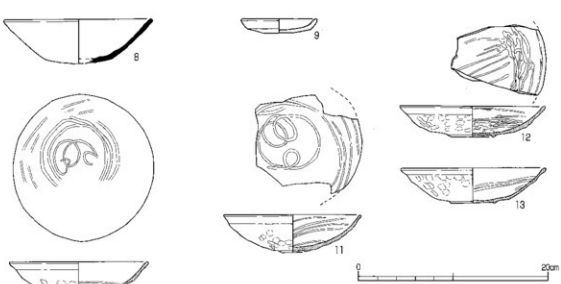
ＳＢ１０２ Ｐ140出土土器（第15図　図版13）

須恵器椀１、瓦器椀４、土師器小皿２が出土した。

８は須恵器椀である。底部と体部の境が甘く不明瞭であり、体部は直線的に開いている。９は手捏ね成形の土師器小皿である。口縁部をわずかに屈曲させ底部との境としている。口縁部は横方向のナデを施している。10～13は瓦器椀である。緩やかに湾曲して体部から口縁部にいたる。体部外面には指頭圧痕が顕著に残る。口縁部は一段のナデを行い、端部は丸くおさめる。底部には低く退化した高台を貼り付けている。内面は、いずれも体部には渦巻き状のヘラミガキを、見込部には10・11が連続輪状の、12は平行線のヘラミガキを施す。

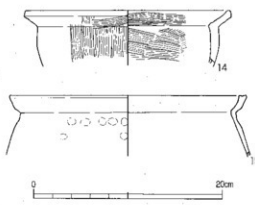
柱穴出土土器（第16図　図版13）

掘立柱建物を構成しない柱穴から出土したものである。いずれも口縁部のみ残存する破片であり、体



第15図　ＳＢ１０２ Ｐ140出土遺物

部の形状は不明である。また傾きもやや不確かである。14はP126から出土した土師器鍋である。口縁部がくの字状に外反し、端部は面をもつ。外面の調整は口縁部が横方向、体部が縦方向のハケ、内面は口縁部、体部とも横ハケである。15はP110から出土した瓦質土器鍋である。鉄鍋を模倣したもので口縁部は受口状に2段に屈曲している。端部は水平な面をもつ。体部上半には指頭圧痕が残存する。



第16図　柱穴出土遺物

第5節　小　結

今回の調査では、調査区の西半部には遺構が少なく、北東部に集中する傾向が確認された。検出した遺構の多くが柱穴であるため、前回の調査と同様に「屋敷」を示す遺構の一部になるものと想定される。これらの遺構群は調査区を越えてさらに東側に広がる傾向にあるため、当然のことながらこの「屋敷」の中心もその方向に存在することとなる。

平成10年度調査で検出した遺構は、調査区の制約があるため、平成9年度検出の遺構と一体をなし、同一の「屋敷地」内の建物群を構成するものか、または、隣接する別の「屋敷地」内の建物を示すものかの判断は安易に下し難いところであるが、SD101～103のいずれかが「屋敷地」の西辺を限る敷地境の溝となる可能性があること、両者間に遺構の非常に疎らとなる空間が存在することなどから、2つの「屋敷地」は別の、隣接する「屋敷地」とすることが妥当かと考えられ、今回の調査はその西辺部分を検出したものと考えている。これらの遺構群も平成9年度調査区検出の遺構と同様に13世紀代に属するものである。

第5章　まとめ

第1節　遺　構

2次にわたる調査の結果、中世を主体とする遺構面を1面、そしてその上下に遺物包含層を確認した。調査によって得られたこれらの成果は主要地方道神戸・明石線の南側で行われた御船遺跡の他の調査成果と概ね合致するものである。

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物、土坑、溝などがあり、その大半は主軸を概ねN30～40°Wに示している。これは調査対象地周辺の現在の街路とほぼ同一の方向であり、御船遺跡で検出された市教委第1次調査区検出の建物、阪神高速道路建設に伴う南地区検出の建物なども同様の方向を示している。同じ御船遺跡でも市教委第4次調査区や阪神高速道路建設に伴う北地区で検出された古墳時代までさかのぼる掘立柱建物などは主軸の示す方位が異なることから、今回検出した遺構の方向は古代以降に設定されたものであろうと考えられる。本調査対象地北側を東西にはしる主要地方道神戸・明石線は古代以降の山陽道にほぼ重複していると推定されているが、調査対象地一帯はこの山陽道をもとにして地割が設定され、以後現代まで踏襲されていると推測できる。おそらく今回の調査で検出した遺構もこの地割の規制を受けていたのであろう。

検出した遺構は溝を境に分布状況が異なること、検出遺構の主体は掘立柱建物であることなどから検出遺構は溝によって区画され、その中で群をなす、つまり「屋敷地」を構成しているものと考える。

今回の調査対象地内では「屋敷地」の主屋と考えられる建物がＳＢ０２とＳＢ１０１の2棟あり、その間は遺構の希薄な部分となるため、耕作地を間に挟んだ2つの「屋敷地」を検出したものと考える。調査区の制約があるため遺跡の全容を把握しがたいが、本遺跡とほぼ同時期の集落遺跡を面的に調査した例として神戸市西区所在の栃木遺跡がある。ここでは平行・直交する溝を多数検出しており、これらによって18m×12.5m程度の区画が多数復元されている。その中には溝によって区画された3つ以上の「屋敷地」が数十mの距離をおいて確認されている。1つの屋敷地は主屋と思われる4間以上の総柱建物とそれに付帯する小型の側柱建物、井戸・土坑などから構成されている。屋敷地以外の区画は水田などの耕作地と考えられ、溝以外の遺構はほとんど検出されていない。おそらく御船遺跡でも栃木遺跡と類似した景観が広がっていたものと思われる。今回の調査では明らかにできなかったが、調査区外には井戸など「屋敷地」を構成する施設が存在している可能性は高い。調査対象地南東側には遺構が空白となる部分をはさんで市教委第1次調査区がある。ここでも本調査区と同様に掘立柱建物が検出されているため、本調査区周辺には12世紀後半～13世紀代を中心とした少なくとも3つの「屋敷地」が存在し、水田を間に挟みながら散村形態の集落を形成していたと思われる。

出土遺物量が少なく、しかも遺構出土のものが限られるため、遺物からそれぞれの「屋敷地」の性格を見ることは困難だが、限られた遺物・遺構から「屋敷地」の性格を見てみたい。

ＳＢ１０１については、建物の規模自体は明らかにしえないが、柱穴掘方の規模・構造（根石の設置など）など平成9年度調査区をはじめとして周囲で検出された他の建物よりはるかに大型であり、しっかりした造りとなっている。一見すると、古代の官衙や有力首長の邸宅を思わせるほどの建物である。柱穴内や周辺からこの建物の住人の性格を断定することのできる遺物は出土していないが、他の屋敷の

住人よりも優位にある人物が居住していたことが想定できないだろうか。またもう1つの「屋敷地」の主屋である可能性の高いＳＢ１０２は建物が示す方向が大きく異なっている。柱穴内から出土した遺物を見る限りは、所属時期は他の建物の時期と大差はないようである。この建物のみ建物の方位が異なる理由は不明ながら地割による規制を受けなかったものと思われる。

第2節　遺　物

1．中世の遺物について

確認調査と2次にわたる本発掘調査により出土した遺物は土器のみであり、その総量は28ℓ入りコンテナ5箱と多くはない。土器は包含層出土のものが主体であり、遺構出土のものは少量、しかも細片である。所属時期は古墳時代～中世と幅をもつが遺構の主体となる中世の遺物が最も多い。この時期の土器は細片が多いものの須恵器椀・鉢・甕、土師器編・小皿、瓦器椀などが認められる。

本調査で唯一の一括出土遺物としてＳＢ１０２ Ｐ140出土土器がある。ここでは供膳具である須恵器椀1点、瓦器椀4点、土師器小皿2点（1点のみ実測）が出土している。ただしこの土器の組み合わせが遺跡における土器の数量の傾向を反映しているわけではない。厳密に数量をカウントしてはいないが、調査区全体での出土量は、瓦器の出土は少量であり、圧倒的ではないものの須恵器が優位な状況である。同じ御船遺跡の阪神高速道路建設に伴う調査の南地区においては、良好な一括資料はないが瓦器の出土量は10点程度と少なく、須恵器優勢であり、本調査区と同様の傾向を示している。

御船遺跡は摂津国の西端付近に位置している。摂津国と接する播磨国明石郡では神出など明石川流域で須恵器生産が行われ、その周辺の集落遺跡における出土土器は須恵器の占める割合が圧倒的である。摂播国境の播磨国側の海岸部に位置する神戸市垂水区所在の垂水・日向遺跡第1次調査地点のＳＫ０４（13世紀前半）出土土器における比率は、須恵器35.3%、土師器41.4%、瓦器22%、供膳具に関しては須恵器椀37.8%、土師器小皿24.4%、瓦器椀18.1%である。一方、御船遺跡に近い神戸市兵庫区所在の兵庫津遺跡の中世前半における様相は、貯蔵具の甕と調理具のこね鉢に関しては東播系須恵器が独占するのに対し、供膳具については和泉型瓦器椀が多く須恵器椀はみられない。少なくとも供膳具についていえば近距離に位置する兵庫津遺跡と御船遺跡の土器の様相は大きく異なり、むしろ播磨国側の遺跡の様相に近いようにみえる。

瓦器は13世紀代に流通の最盛期を迎え、瀬戸内海航路により沿岸部に広く流通する。垂水・日向遺跡でも12世紀代から13世紀代と時代が下がるに従い瓦器の占める割合が増加している。しかし瓦器椀の流通が顕著になりつつも、港湾近郊の一般集落では依然東播系須恵器の影響が強いようである。限られた地域の中でも集落や「屋敷地」の住人の出自、わずかな時期差が土器の比率に反映されているのだろうか。

参考文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「栃木遺跡」　『平成11年度年報』　2000年
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「栃木遺跡」　『平成13年度年報』　2002年
神戸市教育委員会「御船遺跡　第１次調査」　『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』　1999年
神戸市教育委員会「御船遺跡　第４次調査」　『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　2001年

兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）』兵庫県文化財調査報告第270冊　2004年
兵庫県教育委員会『御船遺跡』兵庫県文化財調査報告第278冊　2005年
神戸市教育委員会・㈱神戸市スポーツ教育公社『神戸市垂水区　垂水・日向遺跡　第１，３，４次調査（日向地区・陸ノ町地区）』　1992年

２．肩部に文様の施された布留式甕について

平成９年度調査区で出土した布留Ⅱ式の甕３点の肩部に、波状文や沈線文が施されていた。御船遺跡や近接する御蔵遺跡などでは他に類例が見られず、周辺では玉津田中遺跡狭間地区旧河道 SR54001に１点類例が認められるが、近畿地方全般には奈良県矢部遺跡など一部の出土例を除いて希少な例のようである。このような甕肩部に波状文ないし沈線文を施す特徴は北部九州の庄内式併行の甕に普遍的である（久住1999）ことが知られている。興味深いのは御船遺跡のうち阪神高速道路建設に伴う南１区の包含層から検出された庄内式甕の肩部に２条の山形沈線文が施されていたことである（兵庫県教育委員会2005）。わずかな例ながら、極めて近接した箇所で肩部に山形文や波状文、沈線文が施されていた甕が複数検出され、庄内式、布留式と時期を追ってこの特徴が認められる意義は大きい。ただし文様が伝統的に踏襲され変容されたものなのか、時期ごとに他地域から影響されたものなのかは判断しがたい。

一方もう１点の布留Ⅱ式の甕には５単位で構成される列点文が施されていた。「へら状工具の先端を押捺することにより米粒形を呈する列点文」は「吉備南部に認められる有段口縁の甕に特徴的に認められる」という（次山1993）。布留式甕の成立自体が山陰及び吉備南部などの他地域との関連が想定されており、布留Ⅱ式の甕に広範な地域の特徴が認められることは布留式甕の成立や製作における他地域の影響が関与した可能性を示唆している。

湊川流域から妙法寺川流域地域において、布留Ⅱ式を境に集落規模が縮小する傾向にあり、苅藻川流域では庄内期に盛行した御蔵遺跡が縮小し付近の五番町遺跡や三番町遺跡への推移が想定されている（神戸市教育委員会2003）。御船遺跡では、この時期集落縮小傾向の中にあって、少量ではあるものの外来的な要素を持つ土器が揃っている。御蔵遺跡においても布留式期以降に他地域の土器の搬入ないし影響が認められ、御船遺跡の布留式期の様相は御蔵遺跡からの推移の一断片を考慮しうる状況である。

参考文献

久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」　『庄内式土器研究ＸＩＸ』　庄内式土器研究会　1999年
兵庫県教育委員会『御船遺跡』兵庫県文化財調査報告第278冊　2005年
神戸市教育委員会「第７章　まとめ」　『御蔵遺跡第５・７・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2003年
次山　淳「布留式土器における精製器種の製作技術」　『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会　1993年
兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡　第３分冊』兵庫県文化財調査報告第135-3冊　1996年
米田敏幸「土師器の編年　近畿」　『古墳時代の研究６土師器と須恵器』　雄山閣　1991年
森岡秀人「土師器の移動　西日本」　『古墳時代の研究６土師器と須恵器』　雄山閣　1991年

報告書抄録

よみがな	みふねいせき
書名	御船遺跡Ⅱ
副書名	フレール長田大道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第277冊
編著者名	長濱誠司　藤田　淳　上田健太郎
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号　TEL 078-531 7011
発行年月日	西暦2005年（平成17年）3月18日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
御船遺跡	神戸市長田区大道通3丁目	28106	970233	34度39分51秒	135度8分52秒	19970715・19971104	48㎡	（仮称）長田・大道通3丁目団地建設事業に伴う発掘調査
			970413			19971225～19980303	726㎡	
			980084			19980519～19980602	120㎡	

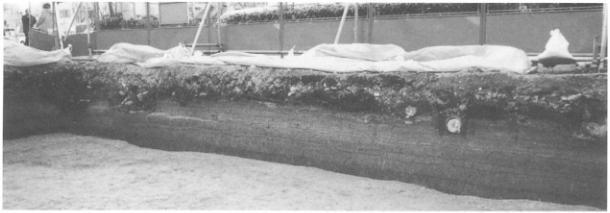
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御船遺跡	集落	弥生～古墳時代		弥生土器・土師器	
		中世	掘立柱建物・土坑・溝	須恵器・土師器・瓦器	溝によって区画された屋敷地を検出

調査対象地周辺

調査対象地全景（東から）

平成 9 年度調査区全景（垂直写真）

平成 9 年度調査区全景（南から）



調査区北壁断面（南から）

下層確認トレンチ東壁断面（北から）

噴砂検出状況（南から）

掘立柱建物全景（南から）

ＳＢ０１（南から）

SB01P1断面（南から）

SB01P2断面（南から）

SB01P3断面（南西から）

SB01P6断面（東から）

SB01P7断面（南から）

ＳＢ０２（東から）

ＳＢ０２ Ｐ18断面（南から）

ＳＢ０２ Ｐ20断面（南から）

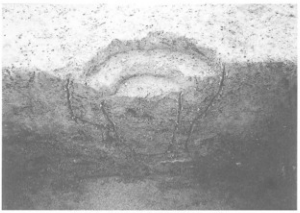
ＳＢ０２ Ｐ19断面（南から）

ＳＢ０２ Ｐ21 断面（南から）

ＳＢ０２ Ｐ５ 断面（南西から）

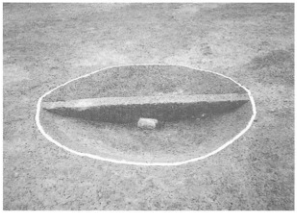
ＳＢ０２ Ｐ21 根石検出状況（南から）

ＳＢ０２ Ｐ22 断面（東から）



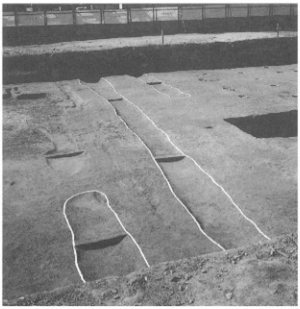
ＳＢ０２ Ｐ14 断面（南から）

ＳＫ０１（東から）



ＳＫ０１ 断面（南から）

ＳＤ０１・０２（南から）



ＳＤ０２（東から）

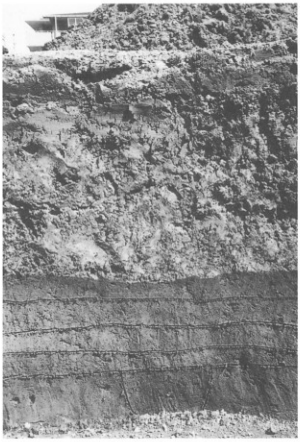
下層土器だまり（西から）

下層土器だまり西半部（南から）

下層土器だまり東半部（南から）

作業風景

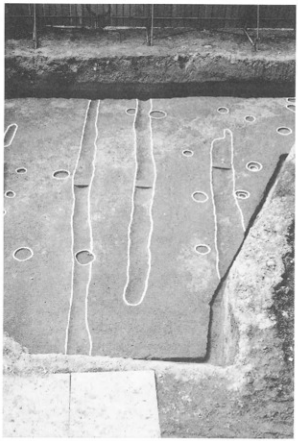
平成10年度調査区全景（南から）



調査区南壁断面（北から）

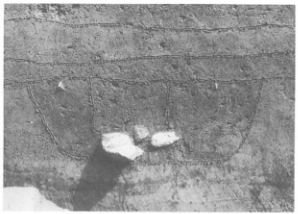
作業風景

SB101・102（西から）



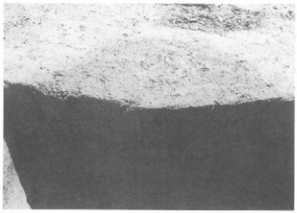
SD101～103（南から）

SB101 P150断面（北から）



SB101 P125断面（北から）

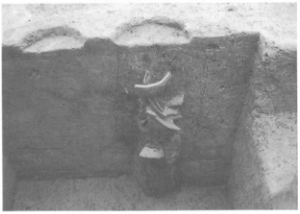
SB101 P119断面（西から）



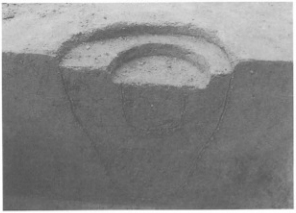
SB101 P147断面（西から）

P128 断面（南から）

P127 断面（西から）

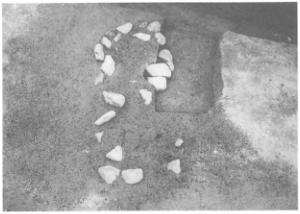


SB02 P140 断面（東から）



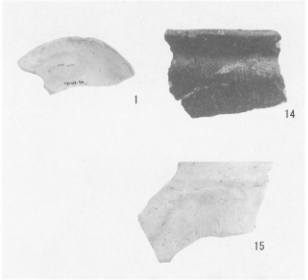
SB102 P131 断面（南から）

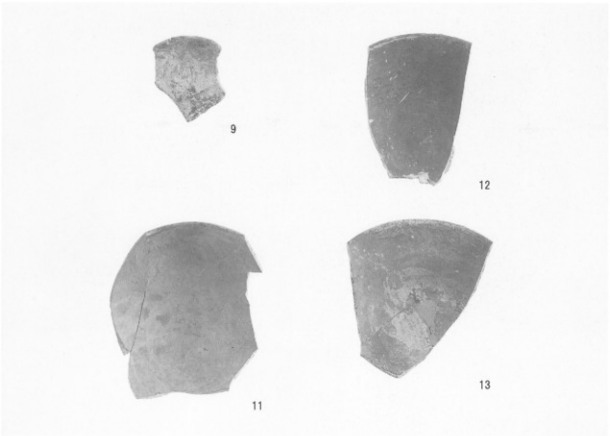
SK101（南から）



SK101 検出状況（西から）

SK101 集石断面（西から）





出土遺物（1）

2

3

4

5

6

7

出土遺物（2）

兵庫県文化財調査報告　第277冊

神戸市長田区

御船遺跡 II

フレール長田大道建設事業に伴う発掘調査報告書

平成17年3月18日　発行

編　　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2－1－5
☎078-531-7011

発　　行　兵庫県教育委員会
〒650-0011　神戸市中央区下山手通5－10－1

印刷・製本　㈱アロエ印刷
〒650-0044　神戸市中央区東川崎町7－12－8
☎078-371-3831